

特別支援学校におけるストーリー性を重視した音楽科の授業づくり

和歌山大学教育学部：上野智子（研究代表）、菅 道子、山崎由可里
和歌山県立きのかわ支援学校：近藤親子、糸 ひとみ、一柳志乃、西本紀彦

1. 研究の趣旨と経過

2020（R2）年度から開始した本連携事業は、大学教員と特別支援学校教員とが連携し、特別支援学校小学部音楽科の授業づくり（以下、連携授業）を実践的に検討するものである。初年度は小学部1年生の授業を取り上げた。

2021（R3）年度は、昨年と同じ児童（2年生）の音楽科の授業づくりを検討した。2年生の児童には、さまざまな障害の特性を持つ児童が在籍しており、発達段階にも幅がある。また、集団活動が難しい児童や人前での発表に苦手意識がある児童、不安感が強く気持ちの調整が難しい児童など、様々な課題を抱えている。音楽科の授業においても、最初から最後まで主体的に参加する児童ばかりではなく、中には途中から教室の外へ出たり、短時間のみ参加する児童もいる。したがって本共同研究では、児童がたとえ部分的であっても楽しんで参加できるとともに、音や音楽の機能を活用しながら児童たちの発達に働きかけるような授業づくりを目指した。その際、音楽療法の考え方や技法を手掛かりとした。

本年度の取り組みは表1の通りである。

表1 2021（R3）年度の取り組み

年月日	概要
2021/12/07	研究討議のための授業実施
2021/12/10	zoomによる12月7日の授業動画の視聴と協議
2021/12/20	zoomによる音楽科授業の事前打ち合わせ
2021/12/21	きのかわ支援学校での音楽科授業の実践（菅、上野、近藤）と協議会
2022/1/11	zoomによる音楽科授業後の検討協議と今後の課題

取り組みの具体については、以下に示す。

2. 第2学年の児童を対象にした音楽科の授業づくり

2-1. 12月7日の音楽科授業の概要

本年度の連携授業の実施に向けて、2年生A・B組計12名を対象に、先ず近藤が研究討議のための音楽科授業を2021(R3)年12月7日に実施した。

12月7日の授業では、以下の3点に配慮して授業づくりを行った（表2参照）。

- 1) 児童ひとりひとりが「何のために演奏するのか」を分かって活動できるようなめあてを設定すること。

- 2) 2020(R2)年度の課題であった、活動全体を貫くストーリー性をもたせること。
- 3) 普段行っている低学年の音楽科授業（28人）ではできない、児童が演奏したい楽器を選択し、一人で演奏する場面をつくること

表2 12月7日の音楽科授業の概要と省察

活動	めあて	児童の様子	省察
① オープニング 《おひさまきらきら》	<ul style="list-style-type: none"> 音楽のはじまりを意識しよう。 	<ul style="list-style-type: none"> ピアノの音が聴こえると、それまで動いていた児童が自分の椅子に座ろうとできていた。 	<ul style="list-style-type: none"> 児童の近くで「おはよう」と声をかけると手を振って応える児童が多かった。
② 鑑賞 《タイプライター》	<ul style="list-style-type: none"> 映像に注目して聴いてみよう。 サンタさんに手紙を送ろう。 	<ul style="list-style-type: none"> 映像に注目して音楽を聴くことができていた児童がいた。 大型テレビとパソコンの接続環境によって音量が小さかったため、注目し辛い様子も見られた。 事前に準備してきた自分の手紙を《サンタクロースにラブレター》の曲に合わせて模造紙に貼ることができた。 	<ul style="list-style-type: none"> タイプライターに興味を持ちながら見聞きできた。 映像に注目するよう伝えても意識を向けることが難しい児童がいた。 情報機器の環境整備。
③ 音楽遊び 《ジングルベル》	<ul style="list-style-type: none"> 一人ずつ好きな楽器を持って曲に合わせて鳴らそう。 サンタさんに音楽を届けよう。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の好きな楽器を選んで鳴らすことを楽しみにし、ほとんどの児童が前に出て発表できた。 箱鉄琴の演奏では、スティックで鳴らすとき力加減が難しく、きれいな音で演奏することができなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> 一人ずつ名前を呼んで鳴らすことで、自分の音に気づくことができた。 お互いの演奏を聴き合うことは難しかった。
④ 身体表現 《しゅりけんにんじゃ》	<ul style="list-style-type: none"> 音楽と映像に合わせて踊ってトナカイに変身しよう。 	<ul style="list-style-type: none"> 映像を見ながらほとんどの児童が身体表現をすることができた。 身体表現が苦手な児童も映像に注目して見ることはできた。 	<ul style="list-style-type: none"> 1回目の活動だったが、軽快な音楽にのって表現できた。2回目からはダイナミックな表現が期待できる。
⑤ 身体表現 《赤鼻のトナカイ》	<ul style="list-style-type: none"> 手本に合わせて一緒に振り付けをしよう。 サンタさんにこの曲をプレゼントしよう。 	<ul style="list-style-type: none"> 映像を見ながらほとんどの児童が振り付けをすることができた。 歌を口ずさむ児童がいた。 	<ul style="list-style-type: none"> 馴染みのある曲でどの児童も映像に注目でき、振り付けたり聴いたりできていた。
⑤ エンディング 《さよならあしたもね》	<ul style="list-style-type: none"> 授業の終わりを意識しよう。 	<ul style="list-style-type: none"> 歌に合わせて手拍子をしたり授業の終わりを理解して着席したりすることができた。 	<ul style="list-style-type: none"> わかりやすい歌詞で覚えやすいため、一緒に歌う児童が多かった。

1-2. 12月7日の音楽科授業の成果と課題

12月7日の授業実践全体の成果と課題は以下の通りである。なお、各活動とその省察については表2を参照していただきたい。

成果としては、個々の児童のめあてを設定したことにより、児童が目的をもってストーリー仕立ての音楽活動に参加できたことが挙げられる。例えば、「さんたさんに、うたとてがみをくれせんとしよう！！」というめあてを設定したことで、児童たちは、クリスマス

にサンタさんが来てくれるよう様々な音楽活動をするという意味を理解することができていた。本時における鑑賞・音楽遊び（楽器による即興表現）・身体表現は、それぞれサンタさんに手紙を届ける（鑑賞）、サンタさんに音楽を届ける（音楽遊び）、トナカイに変身してサンタさんに踊りを届ける（身体表現）というストーリーに沿って行われ、音楽遊びにおいては、自分の好きな楽器を選び、一人で演奏することができたほか、「サンタさんはいつ来る？」と楽しみながら活動に参加する児童の姿も見られた。

一方、課題としては、音楽遊び（器楽の即興表現）において、楽器を操作することの難しさや、互いに聴き合うことの難しさが挙げられる。上述したように、音楽遊びにおいて児童は自分の演奏したい楽器を選択することができた。しかし、スティックで打つ際には力のコントロールが難しい児童もいた。また、他の児童の演奏に耳を傾けることが難しい児童も多く、聴き合う場をどのように設定するかが次の課題となった。

3. 大学教員との連携による第2学年の児童を対象にした音楽科の授業づくり

3-1. 12月10日の協議を踏まえたに大学教員との連携による授業の構想

12月7日の授業を踏まえ、12月10日の協議では、次の3点に配慮した授業を構想した。

1) ストーリー性のある授業にすること。

※もう一度サンタさんに来てもらうというストーリーの中で、めあてを「おんがくのちから（おんがくにあわせてうごいたり、がっきをならしたりして）で、さんたさんをもういちどよぼう！！」として設定。

2) 一人一人が表現する場面をつくること。

3) みんなで音楽を表現（他者の音を聴く、他者と一緒に協働する）すること。

以上のような協議を経て、12月21日、連携授業を実施した（表2参照）。

表2 12月21日の音楽科授業の概要と省察

活動	めあて	児童の様子	省察
① オープニング 《おひさま きらきら》	・音楽のはじまりを意識しよう。	・オープニングは近藤が担当した。曲が始まると、ほとんどの児童が座って待ち、教員が近くと「おはよう」と返事をしたりジェスチャーで返したりすることができた。 ・大学教員を覚えている児童がいて、「お友だちがきてくれた」と楽しみにしたり楽器に興味を示して鳴らそうとしたりする様子が窺えた。	・集団での学習に参加することが難しい児童も、教室の中において何が始まるか気にしている姿が見られた。
② たいこ遊び 《サンタを 呼ぼう》	・一人一人の音楽のパワーで太鼓をたたき、サンタさんを呼ぼう。	・大きな太鼓に興味を持ち、ほとんどの児童が積極的に鳴らすことができた。	・参加者一人一人の承認と一人ずつ太鼓をたたくことができた。 ・小学部2年生に向けては少し大人っぽい楽曲の選択になった。

			<ul style="list-style-type: none"> 一人一人が打って互いの演奏を聴き合う場合の楽器の選択を工夫する必要がある。
③身体表現 《そりすべり》	<ul style="list-style-type: none"> 空からそりに乗ってくるサンタさんを迎えに行くために、高いお山のお山まで、みんなでお迎えに行こう。 	<ul style="list-style-type: none"> キーボードの音に合わせて歩く、ゆっくり歩く(冬眠しているくまさんを起こさない)、走る(雪だるまがおいかけてくる)、止まる、しゃがむ(山のお化けから隠れる)、立ち上がる、などの即時反応の動きでは、音を聴き分けたり友だちの動作を模倣したりしてほとんどの児童が活動できた。 身体表現に参加することは難しかったが、キーボードに合わせてテーブルドラムやラブドラムを鳴らすことで、その子なりのやり方で参加できた児童がいた。 	<ul style="list-style-type: none"> 分かりやすい音楽の提供によって、児童が動きやすかった。 12名全員が、どこかの場面で個々のやり方で活動に参加することができた。
④楽器遊び 《そっと雪をふらそう》	<ul style="list-style-type: none"> そりがふわっと降りてこられるように、そっと音をならしてふわっとした雪を降らそう。 	<ul style="list-style-type: none"> 力加減をコントロールしながら音を鳴らすことが難しい児童もいたが、そっと鳴らすことを理解してうまくできた児童もいた。 「サンタさんが無事に着陸できるように雪をたくさん降らせよう」ということを理解して音を聴くことは難しかった。 全体での活動に参加することが難しい児童もいたが、教員と一緒にサンタの衣装を着て登場することはできた。 	<ul style="list-style-type: none"> 児童への楽器の提示は、直前にし終わったら片づけるようにすると刺激が減り活動に集中できる。 ファシリテーター(大学教員)の声が全員に届くようマイクの活用を検討する。
⑤合奏 《ジングルベル》	<ul style="list-style-type: none"> サンタさんの好きな曲をみんなで演奏しよう。 	<ul style="list-style-type: none"> フラッグ鈴は、複数名で楽器を共有して鳴らすことができるため、教員がリードしながらみんなで合奏する経験ができた。 テーブルドラムを担当した児童は、ファシリテーター(大学教員)の合図に合わせてたり一緒に鳴らしている教員に合わせてたりしてタイミングよく演奏することができた。 	<ul style="list-style-type: none"> 楽器による演奏箇所が単純明快であるため、皆で合奏を楽しむことができていた。 強弱や細かなニュアンスを表現するところは今後の課題である。
⑤エンディング《バイバイ》	<ul style="list-style-type: none"> 授業の終わりを意識しよう。 	<ul style="list-style-type: none"> ファシリテーター(大学教員)の「バイバイ」の歌詞の部分に合わせて手を振ったり、「バイバイ」と答えたりできていた。 	<ul style="list-style-type: none"> 曲の中の「バイバイ」の言葉聴き授業の終わりを意識できた。

2-2. 12月21日の音楽科授業の成果と課題

12月21日の授業実践全体の成果と課題は以下の通りである。なお、各活動とその省察については表2を参照していただきたい。

成果としては、次の3点が挙げられる。

1点目は、「さんたさんをもういちどよぼう!!」というめあてを設定するとともに、めあてに即したストーリーによって、児童たちがクリスマスやサンタさんをイメージしながら音楽活動に参加できていたことである。特に、⑤合奏(表2参照)におけるテーブルドラムとフラッグ鈴の演奏は、大学教員の示すタイミングに合わせて鳴らすことができお

り、ための部分の演奏は教員の動きに注目しながら楽しんでできていた。中でもフラッグ鈴は、一本の紐状の布につけられた鈴を複数人で一緒に鳴らすことができるため、重度発達児童の音楽活動への参加に効果的であると感じた。

2点目は、④楽器遊び（ラブドラムの即興表現）において、サンタさんが無事に着陸できるようなふんわりとした雪を降らせるために、力加減をコントロールしながら柔らかい音を奏でた児童がみられたことである。これは、児童がストーリーを理解していたことはもちろん、予め柔らかい音が出るマレットを選択したことも功を奏したと考えられる。

3点目は、集団に入って取り組むことが難しい児童も、その児童なりに授業に参加する姿がみられたことである。③身体表現では、音楽合わせて動くことを拒否した児童が、教室に置いてあった楽器（ラブドラムとギャザリングドラム）を演奏し、教員に「ここは小さくした方がいいかな？」などコミュニケーションを取りながら、音楽の雰囲気に合わせて強弱をつけたり、柔らかく演奏したりする場面があった。

一方、課題としては、次の2点が挙げられる。

1点目は、楽器の配置や、児童たちに触れてもらうタイミングへの配慮である。本授業では、授業に用いる楽器をすべて児童に見える形で置いていた。前述した③身体表現において、別の参加の仕方として楽器が活用された場面もあったが、他の場面においても楽器が気になり触りに行ってしまうことが多々あった。授業後に学年教員からいただいた感想の中にも「まだ使わない楽器は廊下に出しておいて、必要になった時に教室の中に入れての方が良かったかもしれないと思いました（置いてある楽器が気になってさわりに行っていた児童があったので）」という指摘があり、児童の実態を踏まえながら学習環境を整えていく必要がある。

2点目は、互いの音を聴き合うことの難しさである。②たいこ遊び、③楽器あそびにおいて、児童は一人で即興表現することはできたが、他の児童の表現に耳を傾けることは現時点では難しい様子であった。これについては、スモール・ステップのアプローチで取り組む必要があると考える。例えば、音楽療法の集団セッション行われるような、一人用のタンバリンやパドルドラムを用いて、音楽に合わせてランダムに楽器を提示して鳴らしてもらうなど、音楽の中で集中力が途切れず活動に参加できるような活動をするなど、である。

4. まとめ

2020（R2）年度から始まった大学教員と特別支援学校教員との連携によって、「一人一人が参加可能な音楽科授業の開発」をテーマに音楽科の授業づくりに取り組んできた。

これまでの教材準備の仕方は、学校にある数の揃っている楽器を中心に活用するものであった。しかし、大学教員との協議を通じて、一人一人が演奏に参加できるような楽器の選択の視点を持つようになった。さらには、「この楽曲ならどんな楽器を合わせるとすてきな響きを生むのか」ということも考えるようになり、教材選択の視点が広がった。

2021（R3）年度は、昨年度の課題であった「授業で活動全体を貫くストーリー性をもたせること」を意識して取り組みを進めたことで、児童は、何のために活動をするかわかってできる場面が増え、小学部の教員からは「授業の流れがわかりやすい」という感想を得た。本取り組みは、児童一人一人が参加可能な音楽科授業の開発を意図したものである。加えて、児童だけでなく、一緒に授業を担当する教員一人一人にとっても参加しやすいものにしたというねらいがある。第2学年の教員集団は、日頃から音楽に関する活動はもちろろん、すべての学習活動において協働している。そのため、音楽療法の視点を取り入れた即興的な演奏や、その子なりの授業への参加を受容し、多様な授業づくりに取り組んでいる。

12月21日の授業後の小学部2学年の教員の感想では、授業に参加して「サンタをよぼうというめあてにあわせてストーリーがあり、楽器あそび、身体表現など取り組まれていて何をしたらいいか児童たちも分かりやすかった」、「楽器に触れる時間がたくさんありました」、「もっと鳴らせたなら雪が降るということが目で見てわかりやすかった」などが挙げられた。また、児童の様子について、「主指導者（大学教員）からの言葉がけや歌を通して、楽器に触れたりし、クリスマス等のイメージを持ち、楽しみながら取り組んでいた」、「TVの映像やピアノの音等がわかりやすく、テーマがイメージしやすかった」ことが挙げられた。

今年度重視した「授業で活動全体を貫くストーリー性をもたせること」が授業に反映され、そのことが2学年の教員集団で共有できたことは大きな成果である。

一方で、本年度の取り組みから、以下2点の課題が見いだされた。

1点目は、児童の得意不得意や関わり方で大切にしていることなど、事前に児童一人一人の実態を小学部教員と大学教員とで共有することである。そのためには、授業実施までに打ち合わせを丁寧にし、授業後のカンファレンスもなるべく複数人で実施する必要がある。

2点目は、学習環境の整備である。前述したような楽器の配置や提示の仕方に加え、2教室を繋げた横長の空間で授業を行ったため、児童が活動に注目しにくい椅子の配置にならざるを得ず、児童の演奏や授業者の声が全体に届きにくいという問題も発生した。音楽室や会議室、図書室など刺激が少ない場所や、お互いが見えるような半円に座席配置ができる場所など、授業に適した空間の確保や、授業者の声や一人一人の演奏に耳を傾けることができるよう、マイクを使用するなどの機材の活用も検討する必要がある。

授業後の振り返りでは、「児童の多様な参加のあり方」に寄り添うことの大切さ確認することができた。授業に参加する児童全員がその場に必要な存在として承認され、様々な形で活動に関わることができるような授業を引き続き開発していきたいと考える。今後も特別支援学校教員と大学教員との協働による実践研究に取り組み、音楽の授業づくりの可能性を探っていきたい。